

ふらぐ

この世界には
ロマンがある

ふ~ちゃん、 メイトムへ行くの巻

漫画第2話



目からの
うろこ!

地域と向き合う
大型店舗



- ▶ひととまちとの交差点Vol.02
- ▶宗像海人航海日誌
- ▶ボランティア体験プログラム

表紙イラスト／司馬さやか

むなかつNPOマガジン ふらぐ vol.22

2018年9月5日(年4回)発行 編集／むなかつ市民フォーラム 編集長／立花祐平 編集委員／執行沙恵・榎本みき・中西浩一・柴田耕司 テキスト／谷口竜平 表紙イラスト／司馬さやか (https://shiba-sayaka.net)
発行／〒811-3437 福岡県宗像市久原180 メイトム宗像 宗像市市民活動・NPOボランティアセンター内 編集部 ☎0940-03610311 E-MAIL:munakata@npo-forum.jp



Ship's log 02

海とどう向き合うか



共進丸 機長
ごんだ こうすけ
権田 幸祐

1984年6月25日生まれ。先祖代々続く漁師の家に生まれる。春から秋は巻き網漁、冬はトラフグ漁に従事する傍ら漁業を盛り上げるべく日々奮闘中!

父や祖父の背中を追い漁師デビューして今年で18年目。漁師となつてすぐ修行も兼ねて、父の友人でもある宗岡譲さんの経営する巻き網船団の共進水産にお世話になることとなりました。共進水産は県内でも常にトップクラスの水揚げを誇る水産会社で、現在はその乗組員として(4月〜12月のトラフグ漁以外の時は)お世話になってます。

僕が乗船した頃には水揚げは全盛期の半分程に減少しており、その後も水揚げは年々下降。当初より「このままでは漁師じゃ食っていけん」、そんな声ばかりが囁かれていました。海と向き合い、目の前の仕事を必死で習得し、漁師としての腕を磨く。それだけでは通用しない時代がすでに来ているのは当時の僕でも感じる事ができました。それでも漁師となった当時は、ひと月の内に数度、条件が揃えば豊漁になる日もありました。今はたまたまの豊漁に期待することでもできなくなりました。

目当ての魚が減る一方、燃油高騰に伴い経費は増大。それに加え魚価低迷とまさにお先真っ暗な状態が年々加速しているのが現状です。燃油の高騰は致し方ないとして、資源枯渇や魚価低迷はまだまだ我々の手に負える範囲だと感じています。そこを我々の責任として今は受け止め、改善して行かなければならぬという思いで僕は海と向き合っています。

世界でも類を見ない多種多様な魚食文化を持つ日本。その文化を未来へ繋ぐには、今を生きる我々が海とどう向き合うにかかっています。

いっぽ踏み出そう! ボランティア体験プログラム

市民活動やボランティアを始めてみたい、興味がある。だけどどこへ行って何から始めたらいいか、わからない。あなたの“やってみたい”を“一歩踏み出す”へつなげるプログラムです。さまざまな分野から27のプログラムが掲載されています。ご希望に応じてスタッフも同行しますので、一人で不安という方でも安心! 興味があればお気軽に、宗像市市民活動・NPOボランティアセンターへお越しください。

詳細はコチラから

<http://meitomu.com/taiken>

問合せ
窓口

宗像市市民活動・NPOボランティアセンター
メイトム宗像内(宗像市久原180)
平日8:30~17:00(土日祝は休み)



宗像特産品 プレゼント

コーナー

抽選で
2名

「フロムいけの」の
いちじくじゃむとみかんじゃむの
セットが当たる!!

右記QRコードまたはURLからアンケートに答えていただいた読者の皆様の中から抽選で、ジャムセットをプレゼント!

<https://goo.gl/forms/DdbpYxDuIPryNGSN2>



応募締切は10月31日(水)アンケートはこちら!!

「フロムいけの」から、 秋限定のジャムをおすそわけ

人と人をつなぎ池野地区を盛り上げようと様々な活動を展開している「フロムいけの」。地元農家の完熟いちじくのみを使った「いちじくじゃむ」。メンバー自らが育てたみかんをふだんに使った「みかんじゃむ」。まごころ込めて作られたジャムは素材の味を活かして甘さ控えめで、口にする人を虜にします。素材からラベルデザインまで、池野を代表する完全オリジナル商品となっています。この機会にぜひご賞味ください!



フロムいけのメンバー

【商品】フロムいけの「いちじくじゃむ・みかんじゃむ」各220g/420円 【取扱販売店】赤馬館
【お問合せ先】090-5282-3545(樋口) 【詳細】facebook「フロムいけの」で検索

¥0 TAKE FREE



むなかつ市民フォーラム



<http://forum-munakata.org>

ふ～ちゃん、
メイトムへ
行くの巻

ひとまちの交差点

ふらぐ編集部
しぎよう

宗像のまちで秘かに活動する魅力的な人。
その「ひと」が「まち」と出会い、交わるきっかけを、
ふらぐ編集部がしぎようが取材してきました。



新開さんが手がけた
イベントチラシ



ローカルデザインアカデミー2017の様子。
柴田先生(中央左)と新開さん(中央右)



缶バッジデザインを教える新開さん(右)

ふらぐ編集部と新開さんとの出会いは、昨年行われたとあるイベントがきっかけ。当時「地域との接点がほとんどなくて」と話していた彼女ですが、ふらぐ編集部はそんな彼女が最近どんな地域と交わっているという情報をキャッチー！といったどんな交差点を渡ってきたのでしょうか？

しぎよう：新開さんこんにちはーそもそものんですが、新開さんが宗像に住むようになったきっかけって何ですか？

新開さん：私自身はもともと大分出身で、デザイン専門学校を出てからは東京のデザイン事務所で働いていました。東京での仕事は刺激的でいろんな経験をさせてもらえたけど、過酷な労働環境で体調を崩し、上京して7年後、九州に戻ることにしました。そこで夫の職場から近く、住みやすそうな宗像を選んだのがきっかけですね。

しぎよう：じゃあご主人の仕事の都合で宗像へ来られたということなんですね！

新開さん：そうですね。宗像では引き続き東京の代理店から仕事を受注しながら働いていたのですが、地域とのつながりも欲しいと思っていました。でもどうやって地元で交流を増やしていけばいいのかわからず、悶々とした日々を過ごしていました。そんなとき、ローカルデザインアカデミー2017のチラシを見つけたんです。

しぎよう：もともとイベントに参加するタイプではなかったとお聞きしていましたが、どうして参加しようと思ったんですか？

新開さん：チラシには特殊なインクが施されていて、ひと目でプロがデザインしたものかわかりました。そしてそのチラシをデザインしたと思われる人が講師として登壇するというものだったので、同業のその人にも会ってみたいかつたし、何かまちとつながりができるきっかけになるかもしれないと思い、この時に限っては参加してみることにしたんです。

しぎよう：何か収穫はありましたか？

新開さん：チラシを作成したデザイナーの方に会うことができたのも収穫でしたが、今思うと、同じ参加者として知り合った柴田先生との出会いが、その後宗像の地域活動に関わる大きなきっかけになりました。柴田先生は当時九州大学の人間環境研究院助教。出身である日の里で、これからの団地を住民と共に考える塾を主催していました。その塾に声をかけていただき、講座のチラシ作成を依頼してくださったんです。チラシをみなさんとても喜んでいただいて、私も少しずつその塾に参加するようになっていきました。

しぎよう：お仕事だけではないところで、何か興味湧いてきたということですか？

新開さん：そうですね。自分の興味のあるものやできそうなことを今ではどんどんさせてもらって

しんかい
新開 景子さん

福岡のちいさな
デザイン事務所ants代表/
グラフィックデザイナー



イラスト・ポスター・チラシ
広告・ロゴ・パッケージ等、
紙媒体のデザイン全般の
仕事を請け負う宗像のデ
ザイナー。見た人がハッ
ピーになる様なデザインを
心掛けています。ご相談・
ご依頼はこちらまで。

www.antsfukuoka.com

います。この前は日の里の3つの小中学校で缶バッジデザインの授業をしたり、いただいた廃材を再利用して積み木を作ってみたりもしています。今は仲間と一緒に、日の里にキッチンを中心とした地域の人たちが集まれる場所を作りたいね、と試行錯誤しているところです。私がこんなに積極的に活動するなんて、思ってもみませんでした。

しぎよう：地域に必要とされる中でのお仕事はまた違った達成感があるんでしょうか？

新開さん：そうかもしれないですね。地域の活動はまだどれも手探りですが、これからも進めていきたいです。そしてやっぱりデザイナーとしていい仕事をしていきたい。まだまだ自己のレベルアップもしていけたらと思っています。

“あなたにとっての交差点は、どこですか？”

“柴田先生と
日の里団地の活動に
出会ったことです”



ローカルデザインアカデミー2017とは
むなかた市民フォーラムと宗像市コ
ミュニティ協働推進課が協働して開催
したまちづくり支援セミナー。地方で
の新しい仕事のつくり方をテーマに開
催した。





第14 番外編

好奇心旺盛なタチバナくんが地域にのしかかる課題について取材してきました。

取材に行ってきたばい



地域と向き合う大型店舗

どこの地域でも目にする郊外型のショッピングセンター。モノが売れなくなった時代に衰退してなくなる店舗もあれば、息を吹き返す店舗もある。その違いはどこにあるのか、ゆめタウン宗像の取り組みから考察する。

主役は住民

7 月下旬、ゆめタウン宗像の駐車場スペースには、浴衣を着た女性やテーブルで世間話をするお年寄り、家族で遊びに来た子どもたちなど多様な世代の人たちが賑わう姿があった。ゆめタウンが地域の人たちのために、夏祭りを開催するようになって今年で5回目。「地元の人たちへの感謝を祭りの開催で還元したい」と、当時の店長が思いを形にした。祭りの主催はゆめタウンで、開催に関わる経費を全て負担する。実際の祭りの企画や出店調整などソフト部分は、市民が主体となっている。ゆえに、祭りを彩る出店もすべて地元の人たち。毎年出店する田久有志の会は、この日のためにオリジナルカレーを開発し販売する。今年は目標の300食を売り上げ、その利益の一部は自治会活動の経費として使い地域に還元する。祭りを主催するゆめタウン宗像店長の安藤さんはこう話す。「ゆめタウンでは他の店舗でも地域の夏祭りに協力することがありますが、宗像のように市民一体となってゼロから祭りを作っていく例はありません。宗像の皆さんの地域のために活動する力の大きさを感じました」

ゆめタウン宗像で開催される祭りはこの他に、3月に開催する「夢花見」がある。その両方の祭りの運営を手がけるのは地元宗像出身の林山龍二さん(33歳)。普段は、宗像の魅力を発信することを目的に「フリーペーパーLiV」を発行している。林山さんが祭りの運営に関わるようになったのは、2017年に初めて夢花見が開催された時。知人から声をかけられ運営に参画することになった。「宗像は祭りが多い地域ですが、衰退してなくなる祭りもあります。地域の祭りをこれからも継続させていくお手伝いができればと思い関わらせてもらっています」

地域に歩み寄るゆめタウンの方針

このように市民と一体になって店舗運営を進める背景には、企業としての方針も後押しする。ゆめタウンを展開する株式会社イズミは本社を広島に構え、地域密着で店舗を展開している。買い物でも地域住民に楽しんでもらえるよう、毎週火曜日に安火曜市を実施。宗像店はこの安火曜市に特に力を入れており、野菜部門の売上は全店舗中1位を誇る。「これまでのような単に物を買う場所だけでは、この先店舗を運営するのは難しくなると思います。私たちから地域の人たちに歩み寄って、地域の皆さんが使いやすい店舗を作っていくことを目指しています」と安藤さん。

市民団体の活動拠点として

ゆめタウン宗像はこの祭りの他にも、店舗内の一角を市民が自由に使えるスペースとして解放している。普段は買い物客の憩いの場として、また1年を通じて様々なイベントが開催される。林山さんもこの場所を活用し、今年の3月に「お茶碗グランプリ」というイベントを開催した。「祭りやイベントなど地域のために活動する場所を提供してくれる存在は大きいです」と語る。安藤さんは「地域のためになる活動であれば、市民団体の皆さんにも積極的に使っていただきたいと思っています」と市民の活用が進むことに期待を寄せる。



祭りを運営する林山さん



人気メニューの田久カレー



祭り全体の様子



たじろいぼん

プロフィール

ゆめタウン宗像店長

安藤 裕康さん

岡山県出身。これまで広島、博多、遠賀、熊本、岡山、浮羽の店舗に勤め、今年度より宗像店の店長に。



ゆめタウン店長の安藤さん(左)、店次長の吉田さん(右)

タチバナくん、今回の取材も勉強になりましたか？

勉強になったばい！

